北翔大学教育文化学部紀要創刊号
Bulletin of Hokusho University
School of education and culture department No. 1

平成28年１月
2016 January

想像性から創造性への教育
～音楽によるアンサンブル教育の重要性～

Turning student's Imagination into Creation : On the importance of the Ensemble skills through the music education

今　井　敏　勝
Toshikatsu　IMAI

抄録：現代社会はさまざまな課題を抱えながら，急速に進んでいる。その社会の中で，学生や子どもたちは生き抜くエネルギーを身に付けていかなければならない。経済発展を押し進めると同時に，失っていったものも多くある。しかし，豊かな心を持つ人間の本質は，失われてはならない。

本稿は，音楽のアンサンブル行動により想像性を豊かにし，音楽で創造していく力を養い，成長していくことについて，実践研究を通して考察したものである。また，音楽のアンサンブルを行う過程においては，「社会人基礎力」が身に付き，社会の課題や今後の発展を構築していく「人間力」に繋がる教育となろう。

キーワード：アンサンブル，社会人基礎力，ユニゾン

はじめに

驚異的なスピードで展開される現代社会には，国際化の波，溢れんばかりの情報，環境問題の深刻化，そして悲惨な内紛と戦争などさまざまな問題が山積している。21世紀を担っていく子どもたちにとって，進むべき道は険しいものに思われる。教育に携わる者は，さまざまな問題を抱えた社会を生き抜いて行かざるをえない子どもたちを，どのように指導し支援していくのか，大きな課題を突きつけられている。

学校という教育の現場では，主体性，想像力，自己統制力などの諸側面で，発達が充分でない子どもが増えているように感じられる。「個性化」，「ゆとり化」などの教育課題の裏側では，青少年の社会性や協調性の弱さ，自己責任能力や創造力の低下などの課題も噴出しているように思われる。音楽教育の現場においても，同様に，さまざまな課題を抱えている。

音楽を専攻とする学生に教授・指導している者から見れば，演奏技術の指導，合奏法，音楽科教育法などの音楽的内容は，大切な指導内容の一つである。しかし，もう一度根本的に“人間を教育”するという原点に立ち返ることも必要であろう。音楽を通じてどのような教育ができるのか，また，音楽教育の特色・特徴を生かせる教育は何か，教育の普遍性を整理し，考察

することが重要であると考える。こうした問題意識から，本稿では，音楽という専門性を通じて，教育の普遍性や共通性について考察する。

＊

音楽を行うこと，いわゆる「演奏すること」は，play（遊び）から生まれる。この play（遊び）は一人で行うより，多くの仲間と協働して楽しさを共有することにより，play（遊び）がより楽しくなるのである。この「アンサンブル」という形態は，先人たちの音楽活動の中から，自然に生まれてきたのであろう。「アンサンブル」行動は，現代社会においても大切な行動であり，専門的知識・想像力・創造力・リーダーシップ・協調性など，社会を生き抜くためにとても重要な諸能力が含まれていると考えられる。また，この「アンサンブル」という音楽行動においては，演奏を成功させるためのコミュニケーション力が，なくてはならない重要な要素である。

これらのことを踏まえ，以下では，音楽の「アンサンブル」するという行動が，他のどのような諸要素と関連があるか，また，さまざまな環境の中で人間が豊かな心を忘れずに成長し，影響し合うかを検証する。

Ⅰ　今だから学生に必要な音楽のアンサンブル教育

Ⅰ－1　アンサンブルとは

『標準音楽辞典』によると，「アンサンブル」とは次のように定義されている。

> 「アンサンブル ensemble〔仏〕（1）＜共に＞という意味で，2名以上の重唱または重奏のこと。声楽においてはオペラ，オラトリオなどの，合唱付または，合唱なしの三，四，五重唱などをいう。楽器においては，弦楽器，管楽器，ピアノの各種組み合わせによる重奏のことをいう。（2）慣用語として『アンサンブルが良い（悪い）』などと演奏のバランスや統一性をいう。」[注1]

また，『新編 音楽中辞典』によると「原意は『いっしょに』『ともに』。①音楽では一般的に『重唱』『重奏』のこと。②オペラではとくに，幕の最後などで歌われる二重唱，三重唱，四重唱など。」と定義されている[注2]。さらに『広辞苑』によると，「(『ともに』『一緒に』の意) ①合奏。合唱。②少人数の合奏団・合唱団。③演奏のまとまり具合。『～の妙』④デザイン・色柄・材質などの調和のとれた一揃えの服。組み合わせて着るためのコートとドレス，ジャケットとドレスなど。」と記述されている[注3]。

音楽においては二通りの使い方があり，二人以上の編成や演奏形態のことばとして使用する場合と，演奏上のバランスや合奏技術を表すことばとして使用する場合がある。

音楽のアンサンブルでは，個々の音楽的専門性の能力を高めなければならないことは言うまでもない。リズムや音程・音色など，さまざまな音楽の要素が組み合わされ，調和し融合された音楽が演奏された瞬間，すばらしいアンサンブルが誕生するのである。それと同時に，個々

の練習や音楽的創造力が重要であり，メンバー全員による共同作業として行われる。その共同作業（アンサンブル）には，協調性や高い音楽的目標への強い意思も必要である。また，そこには，演奏に関わる練習だけではなく，コミュニケーションを取り，互いの表現を理解し合うことも含まれている。このことは，社会や職場などで求められている能力や行動など，共通していることが多いのである。

これらのことから，音楽において「アンサンブル」を行うことは，組織や社会の中で多くの人々と共に仕事をするうえで，必要な基礎的能力を高める効果が期待でき，積極的に社会を生き抜くことに繋がると考えられるのである。

Ⅰ－2　音楽のアンサンブルによる表現

音楽を表現するためには，さまざまな演奏形態がある。一人で演奏する独奏があり，二人以上になるとアンサンブルという編成になる。合唱やオーケストラにおいては，声域や楽器などによりパートに分かれているが，パートごとのアンサンブルが融合し，合唱団やオーケストラを編成しているのである。このような演奏形態は小アンサンブルの集合体といえる。

音楽のアンサンブルは，個々の専門的技術を高め，それらの技術を音楽として，聴く人々に伝えていくことが必要とされる。これこそ演奏者と聴衆との音を介したコミュニケーションなのである。演奏者同士は，互いの意見を話し合い，理解を深めなくてはいけないし，時には考え方や解釈の相違により衝突が生じることもある。メロディーを演奏する者は，他のパートに合わせたり，伴奏者と協調し合うことも必要である。また，リーダーシップを発揮し，周りを引っ張っていかなければならないこともある。

筆者は，音楽を将来の職業にしようとしている学生の指導に携わっている。彼らは中学校や高等学校の音楽専科の教員を目指している者が多い。彼らが学生時代に，より多くのアンサンブルを経験し，自らの専門性を高めつつ，他と一緒に協調し協力し合う力を身に付けることを願っている。

Ⅱ　「社会人基礎力の必要性」

Ⅱ－1　「社会人基礎力」とは

昨今，社会に対応しうる若者の人材育成が課題とされている。2005年７月に経済産業省において，企業の経営・人事担当者，教育関係者，NPO，行政など，産学官の有識者で「社会人基礎力に関する研究会」（座長・諏訪康雄法政大学大学院教授）が発足され，昨今の人材育成に関わる課題，特に若年層に不足の「仕事の現場で求められている能力」や「課題を見つけ，取り組む能力」，「自分をコントロールする能力」を中心に議論が進められた。2006年２月に，「職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力」，いわゆる「社会人基礎力」の概念が発表された[注4]。

「社会人基礎力」とは，数年先をも予測することのできない現在社会に向かって，「前に踏み出す力」，「考え抜く力」，「チームで働く力」，これら３つの力を兼ね備えた若者の力と，「主体性」，「課題発見力」，「発信力」など，12の具体的能力の要素から構成されている。この「社会人基礎力」の中には，「専門知識」，「基礎学力」も含まれている。

筆者は，これらにくわえて，「人間性」や「基本的な生活習慣」，いわゆる一個の人間として社会生活を送るための責任感や思いやり，公共心，倫理観，基本的マナー，一般常識・教養などがすべての活動の基盤となっていると思われ，社会人として活躍するための必要能力と考えている。驚異的な速さで進む科学技術の開発，地球全体で取り組まなければならない環境問題など，若者に課せられている問題は少なくないが，このような時代こそ，素晴らしい社会，戦争のない社会を構築していくことのできる若者が必要である。社会で活躍していくためには，さまざまな場面で人々と協調・協力し合い，自己の表現を的確に相手に伝えていくことが重要となる。これらの行動は，よりよいチームを築き，チームの一員として能力を発揮し，成果をもたらすことに繋がるのである。

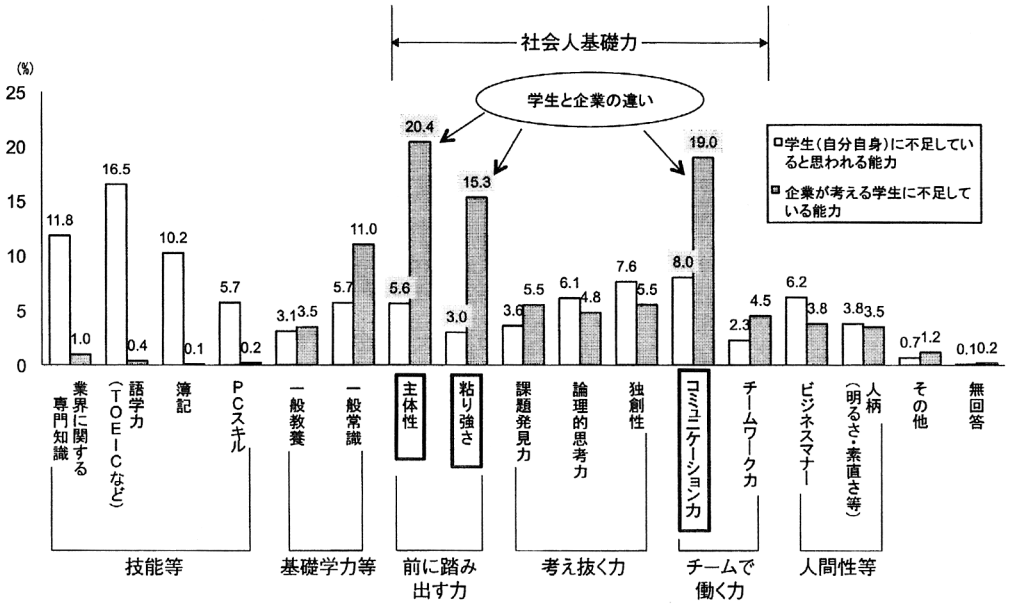
Ⅱ－２　学校教育と現代社会における「社会人基礎力」

現在の学校教育においては，個人の能力育成を中心とする授業内容が多くあるように感じられる。近年の教育傾向では改善されつつあるが，それでも知識の伝授中心の授業が多い。学生が社会人として成長していくためには，一人ひとりが問題点や課題を見つけ，解決していくことや，共にテーマを決定し実践していく経験が必要である。

「人間力戦略研究会報告書」（平成15年内閣府）の見解では，「学校教育と社会，特に産業界とは教育に対する価値観に大きなズレがあります。」という。また，「産業界では，教育とはすなわち人材育成を指しますが，学校教育では，教育は社会における自己実現を目指すとしながら，実際には教科学習を中心としたアカデミズムと，学校組織という枠の中での社会性の涵養に重きが置かれ，産業界からの要請に応えることには抵抗が大きい」と報告されている[注5]。これらの報告を基に「初中等教育から高等教育，職業学校等いずれの教育機関でも，これまで以上に現実の課題と関連付けて教育を行い，それを通して考え抜く力やチームで働く力など，社会人として必要な能力を身に付けさせるための教育改革が行われるようになってきています。」[注6]と述べている。

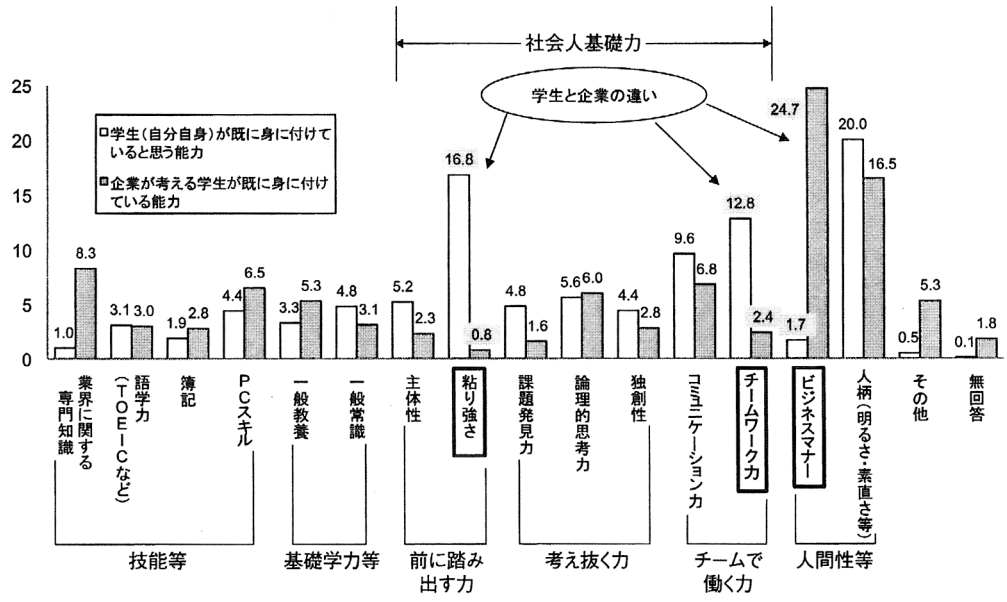
企業人事部と大学生に対して実施した意識調査（平成21年）が，図１，図２である。学生（自分自身）に不足していると思われる「語学力」，「簿記」などの技能は，企業側からは比較的高く評価されている。反対に，いわゆる「社会人基礎力」の中の「主体性」や「粘り強さ」，「コミュニケーション力」の不足を感じている（図１）。また，学生（自分自身）が既に身に付けていると思う「粘り強さ」や「チームワーク力」は，企業側からはかなり低い評価である（図２）。このように企業側と学生側との間に大きな認識の違いが生まれている。

教育現場においては，企業が求める社会人としての能力と，学生が考える社会人としての能



出典　経済産業省就職支援体制調査より
※webおよび訪問によるアンケート　平成21年11～12月実施(大学生1598人、企業1179件)

図１　学生に不足していると思われる能力



出典　経済産業省就職支援体制調査より
※webおよび訪問によるアンケート　平成21年11～12月実施(大学生1598人、企業1179件)

図２　学生が既に身に付けていると思う能力

力に相違があることを再認識する必要がある。

若者が育つ環境も大きく変化しつつある。現在のコミュニケーションの方法は，携帯電話やインターネットなどが多く使用されるようになっている。昭和から平成にかけて，バブル経済が崩れ，パソコンや，ゲーム機の普及，音楽配信機器など，さまざまなデジタル機器が広がった。教育界においても,1996年以降,「個性重視の教育」が進められ，小・中学校では2002年度,高等学校は2003年度から「ゆとり教育」とされた指導要領が施行されてきた。ところが，近年になって「ゆとり教育」が見直され,「生きる力」の重視へと転換されている。この「生きる力」の内容として,「社会人基礎力」が協調されるようになってきている。

学生自身が何かを想像し，創造していく経験が乏しくなってきていると思われる。学生に求められている「社会人基礎力」について，ビジネス系大学教育における「社会人基礎力」の研究を深められている小山修氏は,「失敗と成功との経験を蓄積することによって得られる，いわゆる『社会常識』の水準の違いを含むことを前提とすれば，広く職業人としての社会人が求められる能力要素と枠組みにおいて何ら変わるものではありえない。」と言う[注7]。さらに「それは人間の発達と成長の段階や社会的背景の違いのなかで徐々に形成され，個体の能力評価を重視しすぎる評価体系から見るよりも，人間の類的存在としての組織的能力評価をより重視する評価体系を再構築するなかで，能力要素の概念構築がなされなければならないであろう。」と論じている[注8]。これらは現在の学生たちや若者に求められている能力であり，彼らを育て支援していく者の責務であると言えよう。

Ⅱ－3　音楽のアンサンブルによる「社会人基礎力」

音楽のアンサンブルは想像性を豊かにし，音楽を創造していく力を養うことができる。また,アンサンブルする過程では，現代の若者に求められている「社会人基礎力」の中の「考え抜く力」や「チームで働く力」が身に付き,「コミュニケーション力」の向上に繋がると考えられる。学生たちのアンサンブル経験がより高度で内容が深いほど，社会性，人間性がより大きく成長する。

今日の大脳生理学の分野でも，表現力が大脳機能として重視されている。品川嘉也氏は，人間の集中力と表現力や右脳の働きなどについて,「大脳の働きで最も大切なものの一つは,『プレゼンテーション』という能力であろう。」と言う。「プレゼンテーションというのは，私たちがモノを見たり感じたり，そして考えたりしたことを端的に，そして的確にまとめ表す力のことだ。」，さらに「ひと口で言えば表現力ということである。」と述べている[注9]。
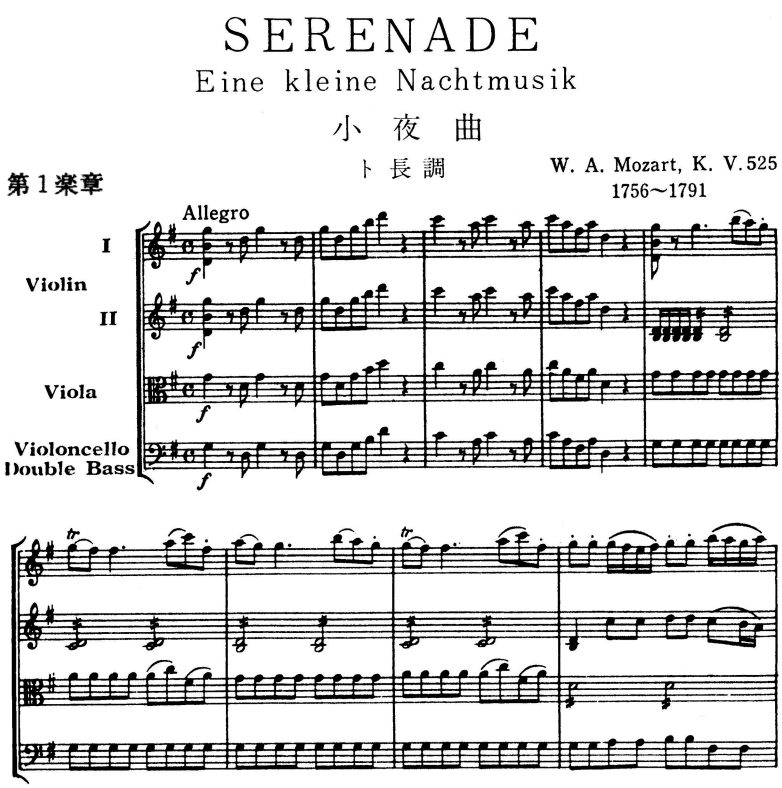
音楽では，音符の一つ一つからイメージし，いかに音として表現していくかが重要である。まさしく表現力を高め身に付けていくトレーニングが，必要なのである。このような大脳機能の「表現力」の定説は，音楽教育においても同様に推察できよう。

Ⅲ　「一緒」の行動とユニゾンのエネルギー

音楽においてユニゾン｛unison〔英〕，Unisono〔独〕，unisono〔伊〕，unisson〔仏〕｝という用語がある。これは「一つの音」という意味であり，同音，あるいは同旋律を複数が一緒に演奏することである。このユニゾンを演奏する者は，リズムはもちろん，音量，音程も「一緒」でなければならない。また，より高度な演奏レベルになればなるほど，音色やアーティキュレーションまで，一糸乱れず演奏することが求められる。たとえば，フルート，オーボエ，クラリネット，ホルン，ファゴットのいわゆる木管五重奏という編成のアンサンブルの中で，ユニゾンの旋律を演奏するとしよう。より高いレベルのアンサンブルでは，いずれの楽器を演奏しているのか聴き分けることができなくなる。まるで五つの音色がブレンドされたように，新しい一つの音色が生まれ，別の新しい楽器が演奏しているかのように聴こえてくるのである。

譜例１は，モーツァルト（W. A. Mozart, 1756～1791）の「セレナード第13番ト長調“アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク”」（Serenade No. 13, “Eine kleine Nachtmusik” K. 525, 2 Vn., Va., Vc., 低音楽器）の冒頭部分のスコア（総譜）である。

譜例１



一拍目だけがト長調（G-dur）の主和音（トニックコード）から始まっているが，後は，ユニゾンで続けられている。今から約200年前に作曲されたものであるが，この旋律は今も世界

の多くの人々の記憶の中にあるだろう。わずか4小節ではあるが，天才モーツァルトの生み出すすばらしい作曲法の中に，ユニゾンの力があると考えられる。このユニゾンの力は，多くの作曲家によって応用されていて，ユニゾンの結集した音と，その後のハーモニーの広がりの対照が，人間の心の中にとても深い印象を与えると思われる。

聴く人々に深い印象を与えるユニゾンを奏するためには，音程やリズムなどさまざまな音楽的要素を一致させなければならない。それ以上にまず演奏者全員が，旋律に対する感じ方（イメージ）や思いを一致させなければ，印象深いユニゾンにはならない。音の強さ・音の長さのニュアンスなどは，最終的に自然に決まってくるのである。管楽器では，タンギングやアーティキュレーション，シラブルなどの奏法に関連し，また弦楽器では，ボーイングを決定するためのポイントにもなろう。

音楽のアンサンブルが集まって大編成になったのが，オーケストラと考えるならば，その中で弦楽器のパートは，すべてユニゾン（Soloなどの例外を除く）である。第1ヴァイオリンは，大編成のオーケストラ曲では20名以上になる。すべてユニゾンで同じ楽譜を演奏している。第2ヴァイオリンも同じで，チェロ，コントラバスもそれぞれの楽器ごとのユニゾンなのである。一人ではなく，多くの奏者でユニゾンを演奏することによって，エネルギーや表現力が深まるのであろう。これは，弦楽の特性を生かした先人たちが考え出した編成で，現代でも同じ方法でオーケストラは編成されている。まさしくユニゾンの集約である。このように音楽のアンサンブルの中で，ユニゾンは特に印象深い音を形成し，演奏を創りだすのである。

社会においても同じことがあり，一つのプロジェクトを数人で行う仕事が多々ある。誰か一人が突出して行うのではなく，皆が一つにまとまって行動し，仕事をやり抜くプロフェッショナルの集団である。協調性，チームワーク力などがとても優れた集団なのだ。音楽のアンサンブルにおいては，音量面も音程も誰かに合わせるのでなく，メンバー全員の音楽性を最大に活かし，研ぎ澄まされた一つの音を創りあげる喜びを生み出すのである。

音楽のユニゾンを創りあげるためには，「チームで働く力」や「チームワーク」が不可欠なのである。音楽も社会においてもユニゾンは，究極のエネルギーと説得力をもち合わせたアンサンブルの協演なのである。

Ⅳ　まとめ

音楽活動におけるアンサンブル行動について考察してきたが，それは音楽家の社会性を養うために重要な行動と考えられる。音楽教育の研究家であるジェームス・L・マーセル氏（Murcell, James L.）は，「音楽のいちじるしい一つの特徴は，それが社会的な芸術であるということです。」，さらに「音楽自体が，いろいろな社会的様式を生み出すものであり，また社会的状態の中で行われるものであるからです」と述べている[注10]。社会的状態の中で行われる音楽によるアンサンブル行動は，「社会人基礎力」の「考え抜く力」，「チームで働く力」を養成する能

力に繋がる。また，現代の若者や学生に最も求められている「コミュニケーション力」や「情況判断力」,「自己制動する力」を身に付けるトレーニングに繋がると考えられる。

『社会人基礎力 育成の手引き』に示されているように,「教育のさまざまな場面における社会人基礎力の養成の姿」として「学生の学びの力を信じ，成長を喜び，授業を他人との深いコミュニケーションの場に」なるように，さまざまな大学では，授業内で「社会人基礎力」を育成する取り組みが行われている[注11]（図３）。

平成 19 年度	宮城大学、東京電機大学、武蔵大学、山梨学院大学、愛知学泉大学、中京大学、大阪大学

平成 20 年度	小樽商科大学、宮城大学、富山大学、金沢工業大学、愛知学泉大学、京都産業大学、大阪大学、山口大学

平成 21 年度	宮城大学	事業構想学部の各学年で実施する「高度な実学による社会貢献」のための実践的授業に社会人基礎力の育成・評価を導入。教員の FD（=Faculty Development= 教員による授業研究会）や web による評価システムも導入した。 [協力企業]NTT東日本-宮城、気仙沼市他
	東海大学	全学部共通のキャリア科目に社会人基礎力育成を導入。また、知識習得型の科目でも、社会人基礎力の育成を意識した PBL 型授業の実施や成績評価方法の変更も行った。 [協力企業](株)アルトナー、田中貴金属工業(株)他
	新潟工科大学	地域産業界に貢献できる「NIIT 人間力」を備えた、実践的もの作り技術者の育成を目標とするプログラムに社会人基礎力の指標を導入した。 [協力企業]柏崎市、(株)北星製作所、(株)白川製作所他
	金沢工業大学	独自の工学技術者育成プログラムに社会人基礎力を紐付け、学部 4 年間を通して社会人基礎力を継続的・段階的に育成するプログラムを構築する。 [協力企業]鹿島建設(株)、倉敷紡績(株)他
	岐阜大学	国立の総合大学で、各学部の独自性やニーズ、育成すべき人材像に合わせた社会人基礎力の育成・評価を目指し、授業改善を行う。 [協力企業]岐阜市内・周辺の医療機関、保育所、保健所他
	愛知学泉大学	社会人基礎力を学則に盛り込んだ大学改革を行い、家政・経営・コミュニティ政策の 3 学部全てで社会人基礎力の育成・評価を導入している。 [協力企業]安城商工会議所、(株)ヤマトグループ
	名古屋産業大学	コミュニケーション力と実践力の獲得を重視した学修システムの開発・実証で社会人基礎力の育成・評価を導入、全学で実施している。 [協力企業]名古屋鉄道(株)、豊精密工業(株)、尾張旭市商工会他
	京都産業大学	キャリア教育研究開発センターを中心に、大学の学びと企業からの課題を行き来しながら学ぶ O/OCF-PBL（On/Off Campus Fusion-PBL）で、社会人基礎力を内面から高め、学習意欲を喚起する。 [協力企業](株)一保堂茶舗、(株)モリタ製作所他
	大阪大学	工学部の大学院の研究・発表活動に、企業側の視点も取り入れた指導を盛り込むことで、世界に真に通用する技術者・研究者として必要な社会人基礎力の育成を目指す。 [協力企業]パナソニック(株)、関西電力(株)他
	広島経済大学	独自の人間力育成プログラム「興動館教育プログラム」を学部とは独立した形で実施し、全学の学生に実践型学習の場を提供する。 [協力企業](株)サンフレッチェ広島、広島市立祇園小学校他
	松山大学	地元のさまざまな企業と協力協定を結び、学生が社会のニーズを見つけ出し、実践的に応えることを中心に据えた「学生参加型事業」の中で社会人基礎力を育成する。 [協力企業]亀岡酒造(株)、(株)ハート、松山商工会議所他
	日本文理大学	大学の理念である「産学一致」に基づき、地域社会のリーダーとなる産業人の育成を目指す。4 年間で人間力を育成するプログラムに社会人基礎力の指標を導入している。 [協力企業]大分県中小企業家同友会加盟企業他

図３　経済産業省モデルプログラム開発事業　採択校

研究者・リーダー人材育成に大学での社会人基礎力育成が必要といち早く考えた，大阪大学大学院工学研究科附属高度人材育成センターの北岡康夫教授は，研究室 OB，共同研究者などを招き，企業人による実践講座を開き，学生のプレゼンテーションに企業人がアドバイスすることを通して，自らの知識・理論へのアプローチの仕方を問い直し，「社会人基礎力」の必要性を学ぶための指導を行っている。「人のためになることを自分の研究＝自分のこととして考えろ，つまり『主体性』を持て，ということだと思います。こうして自分が人に何を与えられるかを見つける，つまり自分が何をしたらよいのかを見つける，ということを目指してほしい」と述べている[注12]。

「難度の異なる複数のプロジェクトに同時に関わらせ，成功体験を積ませることで自信を付け，実社会へ」として取り組む，跡見学園女子大学マネジメント学部の芝原脩次教授は，「小さな成功体験をたくさん積み重ねることで自信を深め，持続して『もっとやりたい』という意欲をかきたてることにもなるのです。」と言う[注13]。また，東京女子大学現代教養学部人文学科英語文学文化専攻の今村楯夫教授は，「教室は発想をシェアする舞台。学生は学びの喜びのために準備を惜しまず，教員は仕掛けを工夫し，知の空間に変える」として英語講読の授業の中で，「社会人基礎力」を育成する教育を展開している[注14]。

さまざまな大学で「社会人基礎力」が今の学生に必要であるとして，それの養成に関する研究が進められている。「専門知識」，「前に踏み出す力」，「考え抜く力」，「チームで働く力」，「キャリア力・人間性」を高め自己を磨く，いわゆる「社会人基礎力」の育成には，音楽におけるアンサンブルという組織要素が重要な学習指導法の一つと考えられる。ジェームス・L・マーセル氏（Murcell, James L.）は，「教育の重要な目的の一つは，すべての人が教養のある生活ができるようになることです。」と強調している。そして，「慣習によって細分されている社会の階級とは無関係に，活発なグループを作る理想的な土台となるものが音楽であるのは，疑いのない事実です。」，さらに「音楽は，すべての人がともに幸福になれる社会形態を生み出す芸術，いいかえれば，最高の民主的な芸術なのです。」と論じている。音楽の指導者に対して「音楽の先生には，音楽を教えるだけでなく，その正しい用い方を指導する責任があるのです。」とも述べている[注15]。

以上のことから考察すると，「社会人基礎力」の育成は，音楽教育においても十分に開発可能であり，音楽におけるアンサンブル行動が，人間力育成に重要な効果をもたらすものであると考えられる。音楽のアンサンブル教育を通して，想像性を豊かにし，創造性を身に付ける教育について，さらに研究を進めていく考えである。

参考文献

1）柳生力『自分のためにうたがあるとき――音楽教育論集――』音楽之友社，1986年５月．
2）藤原義章『新しいアンサンブル入門』春秋社，1992年３月．

3）今井敏勝「学生の想像性から創造性への教育～音楽を使った正課外教育による～」札幌大学『産研論集』第39号，2010年２月，105-116ページ.
4）今井敏勝「想像性から創造性への教育Ⅱ～音楽表現から地域文化～」札幌大学『札幌大学総合論叢』第29号，2010年３月，33-51ページ.
5）今井敏勝「音とイメージ」石澤眞紀夫・今井敏勝ほか（共著）『21世紀の音楽入門』第１号，2002年秋，教育芸術社，36-41ページ.
6）今井敏勝「音楽が甦る『リズム』」有賀誠門・石澤眞紀夫・今井敏勝ほか（共著）『21世紀の音楽入門』第２号，2003年春，教育芸術社，70-77ページ.

引用楽譜

Mozart, Wolfgang Amadeus. Serenade, Eine kleine nachtmusik G-major K.V525.　音楽之友社，OGT101，1952年６月.

注１　『標準音楽辞典』音楽之友社，1966年４月.
注２　『新編 音楽中辞典』海老澤敏・上参響祐康・西岡信雄・山口修監修，音楽之友社，2002年３月.
注３　『広辞苑』第五版，岩波書店，2008年６月.
注４　『社会人基礎力 育成の手引き―日本の将来を託す若者を育てるために』経済産業省編，朝日新聞出版，2010年12月，２ページ.
注５　経済産業省，同書，５ページ.
注６　同書，５-６ページ.
注７　小山修「大学における課外活動をつうじた社会人基礎力の養成」全国ビジネス系大学教育会議編著,『社会人基礎力の育成とビジネス系大学教育』第12集，学文社，2010年12月，178ページ.
注８　同書，178-179ページ.
注９　品川嘉也『右脳刺激で頭が驚くほど鋭くなる！』三笠書房，1997年12月，103ページ.
注10　Mursell, James Lockhart, 1934, *Human Values in Music Education,* New York : Silver.（美田節子訳『音楽教育と人間形成』音楽之友社，1967年，66ページ）.
注11　経済産業省，前掲書，153-283ページ.
注12　同書，193-194ページ.
注13　同書，230-236ページ.
注14　同書，242-263ページ.
注15　ジェームス・L・マーセル，前掲書，78-79ページ.

Turning student's Imagination into Creation : On the importance of the Ensemble skills through the music education

Toshikatsu IMAI

Abstract : In the present society, we are faced with a number of issues. As the pace of society continually speeds up, our younger members of society must learn the way to find the energy necessary to live. The economy constantly grows but we lose other aspects of a well balanced society. However, we never lose our natural human spirit that we all have inside.

In this research, I will show the results that prove that performing tasks in an ensemble can nurture imagination and improve creative abilities. In the case of a musical ensemble, skills of such that are needed in all areas of society improve, as well as a foundation made for interpersonal skills vital to our future.

Keyword : Ensemble. Basic social skills. Unison.